大学院　音楽研究科修士課程　日本音楽研究専攻活動報告　令和４（2022）年度

令和４年度現在、日本音楽研究専攻生５名、研究留学生３名が学んでいます。令和４年度は４名が修士論文を提出し修了しました。またその４名全員が、修士論文審査にかかるプレゼンテーション「オンライン伝音セミナー」の講師に挑みました。

Ⅰ　2022 年度修了生の修士論文題目と要旨およびオンライン伝音セミナー開催報告

■関本　彩子

【修士論文】

「交流」をきっかけにした能楽の普及
　―京都芸術センター トラディショナル・シアター・トレーニング（T.T.T.）とはなにか―

Diffusion of Nohgaku by Means of Traditional Theatre Training

この論文では、「交流」をきっかけにした能楽普及をテーマに、京都芸術センターで行 われている、トラディショナル・シアター・トレーニング（T.T.T.）についての考察を行 った。論文では、「T.T.T. とはなにか」という問いに対して、現在、過去、未来という視点から論じた。現在については筆者の体験を元に、過去については『トラディショナル・ シアター・トレーニング三十周年記念誌』とジョナ・サルズへのインタビューを元に、未来についてはウィリアム･バトラー･イェイツという能楽を参照して戯曲を書いた芸術家を元に分析を行った。 現在については、主に稽古方法がどのようなものであるのか、を論述し、外国からの参加者と一緒に学ぶことでどのような経験が得られたかを考察した。過去については、1984 年に始まった T.T.T. が始まった経緯や、T.T.T. がどのように継続してきたのかを説明し、その特徴について捉えようとした。未来については、イェイツという 20 世紀前半に能楽 を参照して戯曲を書いたアイルランド出身の詩人のことを例に挙げた。T.T.T. に参加した 芸術家が京都で能楽を学ぶという機会を通じて、どのように創作に活かしていくのかということを考察するのにあたり、イェイツの好奇心を参照し、対応させながら論じた。 俯瞰するような形で T.T.T. を論じることにより、「交流」をきっかけにした能楽普及の意 味や意義を考察した。

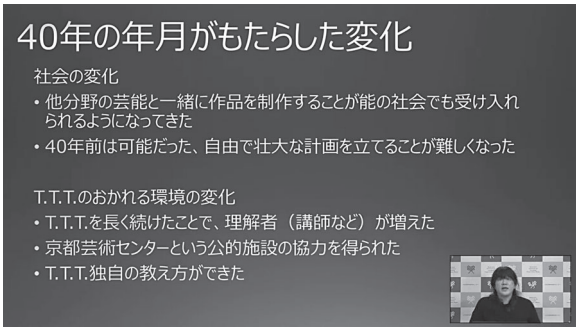
【伝音セミナー】

能楽を通じた日本伝統音楽の普及方法を考える

2022 年 12 月 22 日　午後２時 40 分～午後４時 10 分

YOUTUBE 伝音チャンネルにてライブ配信

https://youtu.be/IjSOwwdJ7SA



■荒野　愛子

【修士論文】

能の謡における作曲とは何か
　―小段［クセ］の分析を中心に―

Musical Composition of *Utai* Chanting: An

Analysis of Section *Kuse*

本論文は、能の音楽、中でも謡の作曲法に焦点を当てる。多くの日本音楽では、型を用いることが慣習的だが、能はその特徴が著しい。能の音楽には、音数の規律を持った言葉と、音楽の拍を組み合わせることによって作られる規則が存在する。それが地拍子である。地拍子研究は、古くは江戸期から、そして明治後期から昭和初期にかけて特に盛んに行われ、数々の理論書が発刊された。また、昭和中後期には横道萬里雄らによる用語の定義づけや分類によって能の音楽研究は格段とやりやすいものとなった。しかしながら、実際の演奏や音楽的内容に踏み込むような研究はこれまでほとんどされていない。理由のひとつには、理論と実演の間には隔たりがあることがあげられる。これは、能が型を用いる特性を持っていることに対応して、型を運用した演奏法や作曲法が無数に存在するからである。第 1 章では、能の音楽研究の歴史を調べ、現在の研究の実態と問題点を考察した。また、江戸後期に書かれた地拍子研究書『洋々集』を紹介しながら、地拍子の基礎的事項を述べた。

本論文の柱は音楽分析である。能は、句･節･小段･段・場というふうに積層的な構造になっている。はじめに句･節･小段という小さい単位から分析を試みた。第 2 章では、小段［クセ］を詳細に分析した。［クセ］は、古くは「曲舞」という独立した謡物の一部であり、もともとは散文的な詞章を持つ謡であったが、能に取り入れられてから、破調を音楽的特徴とする謡という性格が強くなる。［クセ］は、その成り立ちから、音楽的変遷が見られ、世阿弥時代の作品には、［クセ］の型といえるような旋律や終止の特徴が見られるようになる。しかし、それら型の中にも、さまざまな作曲の運用がある。［クセ］は他の音曲と異なる曲種であり、面白く節付けすることを主眼におくべきと、世阿弥が伝書に言葉を残しているように、作者はそれぞれ作品の中で工夫を凝らしていることが、分析の中でわかった。

第 2 章で分析をした［クセ］は、能の中では［クリ］［サシ］［クセ］という小段の連なりから成る段に置かれる。これらの連なりは、「序歌」「叙唱」「本歌」という音楽の流れを作っている。第 3 章では、能《野宮》を題材とし、段から見た小段の役割を考察した。《野宮》は『源氏物語』を原典とする能であり、詞章の中に原典からの引用が散りばめられている。ときにはその言葉の選択が音楽に影響を与え、舞台演出とともに、歌が重要な役割を果たす。曲舞が源流の［クリ］［サシ］［クセ］は、能の中で中心となる語りの段として効果を発揮する。

【伝音セミナー】

能の謡における作曲法とは何か

―『野宮』をめぐって―

2023 年 1 月 12 日　午後 2 時 40 分～午後 4 時 10 分

ゲスト：シテ方宝生流 今井基・小鼓方大倉流 吉阪一郎

YOUTUBE 伝音チャンネルにてライブ配信

https://youtube.com/live/JNVegrPspRQ

今井基師・吉阪一郎師インタビュー

■成瀬　はつみ

【修士論文】

新しい能のプロデュース

―新作能《沖宮》を題材に―

The new produce of Noh: As a subject of the

newly created Noh “Okinomiya”

能には古典曲ばかりでなく、「新作能」と呼ばれる新しく創られた作品が数多く存在している。本稿ではその一つである《沖宮》という作品を取り上げ、新作能がどのようにプロデュースされているのかを明確にし、その特殊性と課題について検討していく。

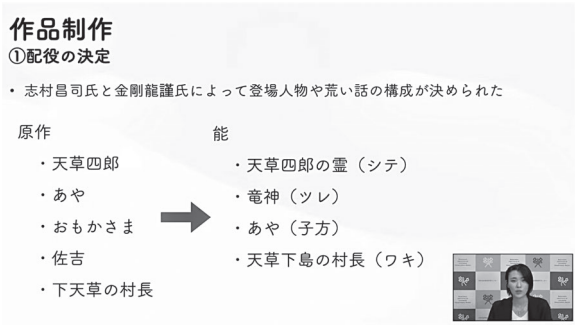
新作能《沖宮》は、作家・詩人である石牟礼道子が原作を著し、染織家である志村ふくみが装束を担当した。この作品は、2018 年に初演を迎え、その後内容を変更して 2021 年に再演されている。

新作能のプロデュースには、作品の内容を作り上げる「作品制作」の側面と、作品を滞りなく上演できるように運営をしていく「運営制作」の側面がある。前者については詞章監修を務めた中村健史氏と、シテを務めた金剛龍謹氏に行なったインタビューをもとに、新作能《沖宮》の制作が決まってから詞章の初稿が完成するまでに、どのような行程を辿ったのかについて詳述する。初稿完成後、初演においても再演においてもさまざまな改定が行なわれているわけだが、その改定はどのような背景や意図で行なわれたのか、またそれによって生じたメリットやデメリットは何かを考察していく。後者については、企画・制作を担った志村昌司氏へのインタビューをもとに詳述する。また、再演では初演の反省をもとに改善した点がいくつかあるのだが、その改善点について運営面と経済面とに分けて詳述する。

インタビューを通して、「作品制作」においても「運営制作」においても、さまざまな問題点や課題が存在することが浮き彫りになった。「作品制作」においては、新作能において問われている課題点を他作品も参照しながら取り上げ、《沖宮》ではその課題をどのように解決しているかについて考察する。「運営制作」においては、他分野の芸能と能とを比較し、そこから見えてくる新作能における「運営制作」の課題について考察していく。

新作能はさまざまな課題を抱えており、簡単に上演できるわけではない。それにもかかわらず、近年は新作能の上演が増えている。さまざまなハードルを越えてまで、新作能を上演するのはなぜなのだろうか。《沖宮》という作品を通して、新作能の意義を勘案する。

【伝音セミナー】
新しい能のプロデュースをめぐって
2022 年 12 月 8 日　午後 2 時 40 分～午後 4 時 10 分
YOUTUBE 伝音チャンネルにてライブ配信
https://youtu.be/laQl8lY-zgI



■藤田　神奈子

【修士論文】
音楽取調掛編『箏曲集』からみる和洋折衷のありよう
The compromise between Japanese and Western style in the “Soukyokushu”

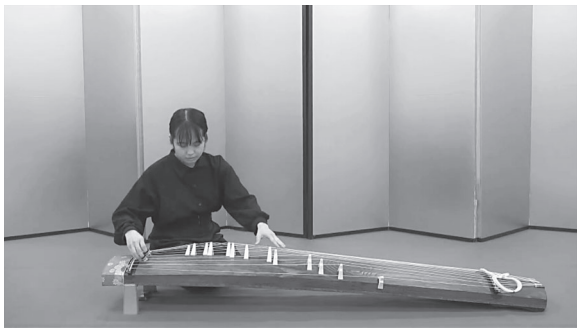
本論文は、文部省音楽取調掛が「俗曲改良」の一環として、1888 年に五線譜による箏曲集として初めて出版した『箏曲集』を掘り下げて分析し、明治初期から導入された五線譜などの西洋音楽文化がこの曲集と当時の箏曲の学びにどのように反映されているか、資料と実際の演奏経験に基づいて様々な視点から考察するものである。

第 1 章では、『箏曲集』の編纂者と音楽取調掛の関係について考察した。8 名の編纂者たちがそれぞれ得意な分野の能力を期待され音楽取調掛へ入所し『箏曲

集』に携わったこと、音楽取調掛が目指した和洋折衷の音楽教育を具現化したのが『箏曲集』であることを明らかにした。第２章では、『箏曲集』の出版･再版･改訂と「緒言」から読み取れる『箏曲集』の役割について考察した。『箏曲集』の書誌、「緒言」の和文・英文の比較、音楽取調掛関連資料に基づいて、①『箏曲集』が音楽取調掛の３大事業を達成するための試みであったこと、②「俗曲改良」において真っ先に目された箏曲の改良を進めたのが『箏曲集』であったこと、③箏はピアノやオルガンに比べ比較的安価であり経済的余裕の無い学校でも入手しやすく音楽教育の即戦力にできる長所があったことを明らかにした。第３章では、『箏曲集』の収録曲を「箏の奏法」と「歌詞」の２つの項目に分けそれぞれの変遷を調べ、分析を行った。「箏の奏法」分析では、曲中の奏法の数量を可視化する一覧表を作成し、収録曲の難易度基準や使用される奏法について曲ごとに考察し、五線譜の特性を活かした独自の表記を用いていることを明らかにした。「歌詞」分析では、「俗曲改良」によって改定された歌詞や新作の歌詞を考察し、学校教育で使用される目的で文部省が刊行したため遊郭関連など青少年に説明しにくい単語や表現が改定の対象になり、若さの象徴や縁起の良い単語を新しい歌詞に採用する傾向があることを明らかにした。

学校教育での音楽の授業は未だに西洋一遍主義の場合が多く、邦楽は軽く扱われる傾向にある。それを音楽取調掛が掲げた方策の失敗が原因だとする批判もある。しかしながら、その音楽取調掛が出版した『箏曲集』で初めて収録された新作が広く個人教授でも使用されるなど、現在の箏曲界へ大きな影響を与えている。『箏曲集』はさらに活用方法を模索することで、現代の学生にとっての箏曲・邦楽に対する関心と行動をよりいっそう引き出してくれるに違いない。

【伝音セミナー】
『箏曲集』から見る明治期の箏曲教育と洋楽受容
2023 年 1 月 26 日　午後 2 時 40 分～午後 4 時 10 分
YOUTUBE 伝音チャンネルにてライブ配信
https://youtube.com/live/CkTMOZEx-Vo



『箏曲集』収載譜より《六段》の演奏

Ⅱ　研究・演奏・その他の活動報告

■成瀬　はつみ

日本伝統音楽研究センターと国際日本文化研究センターの合同主催事業である「お話と演奏―耳で感じるジャポニズム」に運営と演奏者として関わらせていただきました。

あまり馴染みのない音楽を自分達の解釈で一からつくり上げるのは難しくもありましたが、歴史に埋もれてしまっていた数々のシートミュージックをたくさんの方々にお届けできて嬉しかったです。

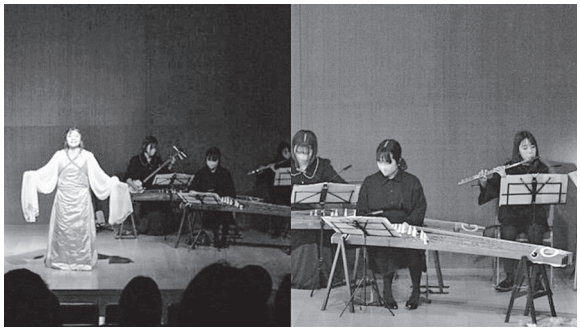
歴史の一部としてしか知らなかった「ジャポニズム」の新たな一面を知ることができ、また音楽という世界の広さと奥深さを実感した演奏会でした。

成瀬はつみ　右から２人目　© DRIAN NAKAGAWA

■藤田　神奈子

2023 年 1 月 15 日、私の師でもある母・藤田良子が主宰の箏教室で発表会が行われ、十七絃箏で参加させていただきました。コロナ禍によりこのような場は自粛しておりましたが、ようやく開催できました。技術的な面の成果をお見せするのと同時に、親睦を深めることができた機会となりました。

京都女子大学大学院の森本侑花さんが作曲した音楽劇『帯と』（2022 年 7 月 31 日初演、2023 年 2 月 22 日再演）にて、箏演奏をさせていただきました。箏・三味線・ピアノ・フルートというめったにない共演だったこともあり、全員が手探りで挑んだ作品でもありました。令和という新しい時代だからこそ実現できた和洋折衷音楽の面白い試みに参加できたことをうれしく思います。



■阿拉　騰沙

2022 年 8 月 1 日に尺八青木先生授業と有志による試演会でモンゴルの 胡弓（四胡）と日本の胡弓を皆さんに演奏しながら紹介しました。日本の胡弓でモンゴルの伝統 楽器 の演奏法を応用して、モンゴル民謡を演奏しました。また、モンゴルの胡弓で日本民謡の「さくら」を 演奏しました。見に来た皆さんに「新しい音色のさくらを聴きました。とても面白かった」と言って頂きました。私にとっても、大いに面白い体験でした。

■方　芳

2022 年度は、週 1 回の古琴の稽古と書道の学習を継続し、琴棋書画の世界に深く触れることができた。また、京都の博物館やお寺を訪れ、日本文化の奥深さに触れることができた。さらに、研究以外にも行政法とプログラミング言語を勉強し、自分の視野を広げることができた。このような多様な活動を通じて、自分自身を成長させ、人生においての幅を広げることができた 1 年間であった。来年度も、さらに多くの経験を積んでいきたいと考えている。